



TITLE:

京都大学言語学懇話会 1998-1999年度活動報告

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学言語学懇話会 1998-1999年度活動報告. 言語学研究 1999, 17-18: 123-135

ISSUE DATE:

1999-12-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88008>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会
1998 – 1999 年度活動報告

1998 年度

第 46 回例会

1998 年 4 月 18 日 (土) 午後 1:30～4:45

京大会館 212 号室

研究発表

「日本語反事実条件文解釈における認知的写像と対応物」

田窪 行則 (九州大学)

「女真語より満洲語へ —その系譜関係を探る—」

清瀬 義三郎 則府 (姫路獨協大学)

第 47 回例会

1998 年 7 月 11 日 (土) 午後 1:30～4:45

京大会館 102 号室

研究発表

「アクセント合成と参照箱仮説」

定延 利之 (神戸大学)

「ロシア語の否定生格」

青木 正博 (京都産業大学)

第 48 回例会

1998 年 12 月 12 日 (土) 午後 1:30～4:45

京大会館 211 号室

研究発表

「～ヲ／ニ～ガ文に見る日本語の文の構造と文法の特質」

上山 あゆみ (京都外国語大学)

「仏典蒙古語の特徴について」

樋口 康一 (愛媛大学)

1999 年度

第 49 回例会

1999 年 4 月 10 日 (土) 午後 1:30～4:45

京大会館 102 号室

研究発表

「条件文の対照言語学的研究 —プロトタイプ論的アプローチ—」

有田 節子 (愛知教育大学)

「漂流民の伝えた朝鮮語 —島根県高見家文書『朝鮮人見聞書』について—」

岸田 文隆 (大阪外国語大学)

第 50 回記念例会

1999 年 7 月 3 日 (土) 午後 1:30～4:45

京大会館 102 号室

研究発表

「活格タイプとしてのハイダ語 (北米インディアン諸語)」

堀 博文 (静岡大学)

「蔵緬語と通時言語学」

西田 龍雄 (京都大学名誉教授)

第 51 回例会

1999 年 12 月 11 日 (土) 午後 1:30～4:45

京大会館 211 号室

研究発表

「ヒットライト語史的形態論の諸問題」

吉田 和彦 (京都大学)

「カメオの話」

奥西 峻介 (大阪外国語大学)

アクセント合成と参照箱仮説

定延利之

sadanobu@kobe-u.ac.jp

語句や文を言語記号（つまり意味と音韻形式の合体物）にとらえる考え（言語記号観）や、大きな言語記号を小さな言語記号の集まりにとらえる考え（文法記号観）は、最近の認知主義的言語研究（特にラネカーの認知文法）の中で優勢になってきているが、問題がないわけではない。

この発表では、これらの考えにとって重大な反例となる2つの現象（『ブラケット・パラドクス』『並列標識の偏った分布』）を取り上げ、言語や文法を記号というよりも話し手の心的行動としてとらえる考え（言語行動観・文法行動観）をとる立場から、これらの現象の説明を試みた。

具体的には、音韻形式を作出する話し手の行動に関する仮説（参照箱仮説）を提出することによって、音韻形式作出独自の事情を認め、音韻が意味を忠実に反映しない場合があることを説明した。参照箱仮説の内容は、音韻形式作出には2チャンク更新型のスキニングが用いられるというものである。

また、現代日本語における『アクセント合成』についても参照箱仮説を適用すると、これまでの規則が統一的に説明でき、これまで指摘されていなかった事柄（前部要素の長さが合成アクセントに関与する場合があること）も予測できることを説明した。

紙面の関係で、詳細な説明はすべて割愛せざるを得ない。この発表よりも前の段階の考えに基づくものではあるが、スキニングについては定延(1998a)を、『ブラケット・パラドクス』については定延(1997)を、『並列標識の偏った分布』については定延(1998b)を参照されたい。『アクセント合成』については、この発表をさらに発展させた定延(近刊)を参照されたい。

定延 利之 1997 「ミスマッチを収容できる言語観を求めて」, 音声文法研究会(1997 編), 『文法と音声』, 東京: くろしお出版, pp. 167-196.

定延 利之 1998a 「言語表現に現れるスキニングの研究」, 京都大学博士論文.

定延 利之 1998b 「並列標識の偏った分布と参照箱仮説」, 『日本認知科学会第15回大会発表論文集』, 日本認知科学会, pp. 46-47.

定延 利之 近刊 「アクセントを合成するとは何をどうする行動か」, 音声文法研究会(編), 『文法と音声2』, 東京: くろしお出版.

(さだのぶ としゆき、神戸大学)

自然言語の条件文研究では、if 構文の意味を論理結合子の質料含意 ($P \rightarrow Q$) と同一視し、それでは説明できないように見えるさまざまな現象を会話の含意あるいは暗黙の前提で説明しようとする、真理関数的アプローチが主流である。それに対立する見方が前件と後件の関連性こそが条件文の意味だとする関連性アプローチである。この二つのアプローチは、条件文の意味を必要十分に規定しようとしているという意味で必要十分条件的だといえる。一方、Comrie(1986)は「構文は必要十分条件によってではなくプロトタイプによって同定されるべきである」とし、さまざまな言語現象を通して説得的にその妥当性を示している。本発表では、プロトタイプ論的アプローチにより、従来の研究では十分に解決できていない日本語の条件形式の分布および分化のメカニズムの解明を試みた。

まず、自然言語の条件文は以下のようなカテゴリーとして捉えることができる。

(1) a) 代替世界 (alternative world) を構築する。 b) 代替世界に基づいて推論を行う。
このようなカテゴリーである条件文を構成する典型的な成員を以下のように仮定する。

(2) 条件文の典型例 (predictive conditionals)

a) 前件 P が成立する世界を仮定する。 b) その仮定世界での後件 Q の成立を推定する。

発表では、(2)のようなタイプの典型例とそこからはずれる非典型例を成員として持つカテゴリーとして条件文を捉え、それによって次の二つの問題の解決を試みた。一つめは、日本語のバ系列の条件形式が三つに分化している（レバ、タラ、ナラ）ことが何を意味するのかという問題である。これは条件文の典型例の特徴と日本語の構造的特徴の相互作用によって説明が与えられる。すなわち、時制が発話時を基準にしたイベントの時空間上の位置づけを担う文法カテゴリーであることから考えると、仮定世界に基づく推定が表される条件文の典型例においては時制は時制本来の役割を担わなくなることが予測される。英語では、典型例には時制のバックシフト現象が見られる。一方、日本語には主語の顕在化に時制が関与しないという構造的特徴がある。レバ、タラ形式に導かれる条件節には時制が含まれず、しかも、日本語の条件文の典型例の多くはレバ、タラ形式によって表されており、時制形式を含むナラ形式の使用は制限される。ナラが使用される場合は、(英語の時制の現象と同様) 現実世界の時間関係の表示という時制本来の性質は失われている。つまり、日本語のレバ、タラ形式の典型例における分布の優勢と、英語における時制のバックシフト現象とは同じ動機付けによって説明できるのである。

もうひとつの問題は、条件形式がなぜさまざまな意味を持つように見えるのかという点である。これには、プロトタイプ的なカテゴリーである条件文がどのような成員によって構成されるかという観点から説明が与えられる。つまり、条件文は「代替世界」の典型である仮定世界が別の領域へ拡張されることにより、前件と後件の関連性が変質していき、さまざまな意味を持つように見えるのだと考える。ただし、その拡張は無制限に行われるのではなく、条件文というカテゴリーの成員であるための最低限の「条件」((1))が保持されている必要がある。

(ありた せつこ、愛知教育大学)

漂流民の伝えた朝鮮語
—— 島根県高見家文書「朝鮮人見聞書」について ——
岸田文隆

島根県高見家文書に「朝鮮人見聞書」と題する一写本が伝わるが、その中には、朝鮮から当地に流れ着いた3件（1810年、1819年、1829年）の漂流記事が含まれており、取り調べに当たった日本人が漂流民より聞き取った朝鮮語がかなによって書き記された部分が見られる。これは、ハングルの文字表記に拠らずに当時の生の朝鮮語口語を直接記録したものであるという点で、看過できない資料的価値を有しているが、本発表は、この写本の解題を試みるとともに、かな書き朝鮮語の復元を含め将来この資料を朝鮮語学の立場から利用するに当たっての、予備的調査・考察をおこなったものである。

まず、第1章では、江戸時代に朝鮮から日本へ流れ着いた漂流民に関する記事の中に、朝鮮語の資料として利用できるものにいかなるものがあるかについて概観した。漂流民自身がハングルあるいは漢字借字表記によって書いたいくつかの断片的な資料（韓国国史編纂委員会所蔵対馬宗家文書[文書類:7060, 5931, 7064, 5931, 346]や、黒田藩の儒者、櫛田駿編録の「朝鮮聞見録」に収められた李正録の上書とその注釈など）を紹介しながら、それらの中に漂流民が用いた言語についての情報を含んでいるものがあることを述べた。

つぎに、第2章においては、島根県高見家文書「朝鮮人見聞書」の解題をおこなった。本書の冒頭部分が『三国通覧図説』からの抜き書きであることを指摘したあと、その後に収録された3件（1810年、1819年、1829年）の漂流記事につき、宗家文書「両国往復書牒」等の史料を利用しつつ検討を加えた。

最後に、第3章においては、本書所載のかな書き朝鮮語につき、その本格的な解説・復元のための予備的調査として、朝鮮語の方言形等との照合をおこなった。その結果、本書所載のかな書き朝鮮語は、その情報源である漂流民の出身地、慶尚道の方言形に類似または一致するものが大半を占めることが確認された。

以上おこなった調査・考察に拠り、本書所載のかな書き朝鮮語を、近世末の慶尚道方言を反映した一資料として学界に提供することができたと思う。

（きしだふみたか、大阪外国語大学）

活格タイプとしてのハイダ語（北米インディアン諸語）

堀 博文

カナダ北西海岸地域で話されるハイダ語 Haida（系統不明）の1人称と2人称の代名詞には、作動者格 *agentive* と目的格 *objective* という2種類の格の区別がある（3人称代名詞と名詞には格の区別がない）。他動詞の主語としては前者、また、目的語としては後者が専ら使われるが、自動詞の主語に関しては、作動者格を使う場合と目的格を使う場合の両方があり、そのいずれが現われるかは、自動詞の意味特徴による。例えば、「歩く」「踊る」といった動詞の場合は、作動者格の人称代名詞が現われ、一方、「眠い」「汚い」といった動詞の場合は、目的格の人称代名詞が現われる。前者のような動詞を作動者格動詞、後者を目的格動詞と称する。このように、ハイダ語は、自動詞の主語が人称代名詞の場合、動詞の意味特徴によって2つの格で現われるという点で、「分裂自動詞性 *split intransitivity*」（Merlan 1985）を有し、「活格・不活格 *active-inactive* タイプ」（Sapir 1917）の言語であると見做すことができる。

では、ハイダ語において、作動者格動詞と目的格動詞を区別する意味特徴は何か。例えば、先行研究では、目的格動詞は、「状態や性質」（Swanton 1911）、「心理的・身体的状態」（Levine 1977）を表わすとしているが、しかし、状態を表わしながらも、作動者格代名詞をとる自動詞もある（例：「座っている」）ことから、状態を表わすか否かという特徴がこれら2種類の動詞を分かつに十分であるとは考えにくい。むしろ、ハイダ語のこれらの動詞に関わっているのは、[agency] と [control] の2つの特徴であると考えるのが妥当である。即ち、作動者格動詞は、これら2つの特徴を有し、参加者がある状況を引き起こしたり、制御することができるような状況を表わすのに対し、目的格動詞は、これらの特徴をもたず、参加者が引き起こしたり、制御することができないような状況を表わすとひとまず記述することができる。

しかし、更に詳しくみると、ハイダ語の動詞には、これら2種類の動詞の中間的ともいうべき動詞が存在する。これらの動詞を意味特徴から更に細かく分類すると、[agency] を有するが、[control] は随意的な動詞と、それら2つの特徴がともに随意的な動詞の2つに分かれる。前者には、例えば、「すべる」「げっぶする」などがあり、主語が1人称代名詞の場合、両方の格が現われ得るという特徴がある。これらの動詞は、その行為が実際に参加者によって引き起こされるが、参加者は、それを制御できないことを表わす。一方、後者には、「愛する」「嫉妬する」といった動詞が属し、1人称は目的格しか現われないのに対し、2人称は両方の格が現われ得るという特徴がある。これらの動詞は、主に心理活動を表わすものであり、共通の統語的特徴として、その動作の対象者（例：「愛する」対象者、「嫉妬する」対象者）を後置詞（附属語）で示し得るという点があげられる。

以上をまとめると以下ようになる。

	1AG	1OBJ	2AG	2OBJ	
A: [+agency, +control]	+	-	+	-	（「歩く」「踊る」）
B: [+agency, ±control]	+	+	(+)	+	（「すべる」「げっぶする」）
C: [±agency, ±control]	-	+	+	(+)	（「愛する」「嫉妬する」）
D: [-agency, -control]	-	+	-	+	（「眠い」「汚い」）

1) AG: 作動者格, OBJ: 目的格, 1: 1人称, 2: 2人称

2) +は、つねにその格の代名詞が現われることを示し、(+)は、現われる場合があることを示す。

3) [±] は、その特徴が随意的であることを示す。

（ほりひろふみ・静岡大学）

同系統に属する諸言語を比較することによって祖語を再建し、祖語の段階から各分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることは、比較言語学の最も重要な課題である。言語のこのような歴史的研究の分野において、研究の進展に大きな影響を与える要因として、つぎの2つが考えられる。ひとつは従来知られていなかった新資料の発掘であり、もうひとつは新しい方法論の導入である。前者は文献資料の追加という量の面からの、後者はより優れた言語学的解釈をもたらす質の面からの寄与とすることができる。ヒッタイト語やその周辺のアナトリア諸言語で書かれた新資料の発見、およびヒッタイト語粘土板文書の時代区分は、量と質のそれぞれの面から、近年のアナトリア諸語研究に対して以前とは根本的に異なる視点を与えている。

このような新しい視点に立つことによって、これまでまったく不可解だった問題、あるいは不十分にしか理解されていなかった問題を解明することが可能になる。ここでは、史的形態論にかかわる3つの問題を考察した。まず、ヒッタイト語の中動態過去語尾に付与される *-ti* (*t* が母音間でつねにシングルで書かれているので、*[di]* と発音されていたと考えられる) という小辞の起源について、新しい説明を提案した。この形式は、アナトリア祖語の再帰小辞 **-ti* (後倚辞) に遡り、ホストが **s* で終わる場合には、**i* の前で一般に生じた破擦化 (**-ti* > **-tsi*、**-di* > **-dzi*) を免れた。そして後に、中動態現在語尾と過去語尾とのあいだの形態上の区別を明瞭にするために、後者に付与されるようになった。さらに、中動態過去語尾と結びついたこの **-ti* は、前ヒッタイト語の時期になお存続していた子音の第2弱化規則によって **-di* になったと考えられる。つぎに、ヒッタイト語 *šiuatt*-“day”について、この名詞が本来 *amphikinetic* タイプの母音交替を示しており、後にレベリングの影響を受けたことを明らかにした (印欧祖語 **d̥i̯eu̯-ot-m̥*/**d̥i̯u̯-t-és* → アナトリア祖語 **d̥i̯eu̯-ot-m̥*/**d̥i̯eu̯-ot-és* → **d̥i̯eu̯od-*/**d̥i̯eu̯ot-*)。 *šiuatt*-の語頭の *š-* は **d̥i̯-* から破擦化、語頭子音連続の簡略化それに語頭子音の無声化によって説明される。つぎに、古期ヒッタイト語の *ši-i-ua-az* などにみられる *scriptio plena* *-i-* は、アクセントを持たない **e* を反映している。また、ヒッタイト語 *šiuatt*-の弱化していない *-tt-* に対する楔形文字ルウィ語 *tiuat*-の弱化した *-t-* (< **-d-*) は、アナトリア祖語の時期に生じた弱化規則によるものである。ヒッタイト語と楔形文字ルウィ語は、それぞれの個々の歴史において、前者は **-t-* を持つ弱語幹を、後者は **-d-* を持つ強語幹をパラダイム全体に一般化した。最後に、リュキア語 *χawa-* “sheep”に関して、この名詞が起源的には *acrostatic* タイプの母音交替 (**h₂óu̯-i-s*/**h₂éu̯-i-s*) によって特徴づけられることを提案した。

(よしだ かずひこ、京都大学)

カメオの話

奥西峻介

カメオとは縞瑪瑙やサルドニア貝の貝殻の層の色彩差を利用した彫刻のことである。貴人の横顔や神話の女神像を彫刻したものが圧倒的に多い。

今日カメオと呼ばれるものの中には紀元前の制作とされるものもあり、古い歴史をもつのだが、「カメオ」という言葉自体は、13世紀を遡った記録がない。ラテン語 *camehu*、フランス語 *camahieu*、イタリア語 *chammeo* などが最古層の語例で、現代諸語の「カメオ」はいずれもこれらの語に基づくと考えられる。

古典期にカメオに当たる語が見られないのは、概念としてのカメオがなかった可能性がある。ヨーロッパの美術館などに収蔵されるカメオの代表作はコンスタンティンノーブルから招来されたものと伝えられ、おそらく、1204年に第4回十字軍が同地を征服したことなくは無縁ではなからう。「カメオ」という語の出現とカメオの招来がほぼ同じ時期であることは、物とともに語が東方から齎されたことを示唆する。

「カメオ」についてはさまざまな語源が提唱されている。ギリシア語 *kamton* 「劳作」、*keimeelia* 「宝物」（重文字は長音表記の代用。以下同様）、アラビア語 *qam'a* 「ラクダの瘤」、*qamuu'd* 「釘」、*qamaa'il* 「花瓶」。いずれもカメオに近い音の言葉にすぎず、意味上の繋がりに無理があり、首肯しがたい。

ヨーロッパ中世の人々は、意外と土俗的な習慣をもっていた。カメオとりわけその骨董品は万病に効く護符として身につけた。カメオにそのような魔力があるのは、イスラエルの民が砂漠を彷徨したとき作ったからだとし、*pierres d'Israel* 「イスラエルの石」と呼ばれた。そういう意味で、「カメオ」をヘブライ語 *qemi'a* 「小鞆」あるいは *qaamee'a* 「魔方陣」に基づくとする M.Gaster や E.A.Wallis Budge の説は一理ある。ケミアは旧約聖書の詞句を入れた革の小箱で、ユダヤ教徒が儀式で額と左上腕に括りつけるものである。また、魔方陣は、例えば、縦、横、斜の各和が15のばあい、神を表す四字語（テトラグラマトン）YHWH の短縮形 YH がヘブライ文字数価では15であるなど不思議な暗合にも神秘性を感じて護符とされたものである。しかし、これらの「物」はカメオと余りにも遠いし、ヨーロッパ諸語の古形と語末も一致しない。

思うに、「カメオ」はペルシア語 *kumaaha* 「腕につける邪視除け」に来源するのではなからうか。この語は16世紀の古辞書『明解（ボルハーンカーテ）』に見えるが、すでに死語であり、詳細は分からない。より一般的な語としては *muhra* がある。物としては、「玉」「貴石」「貝殻（とくに寶貝）」と訳さなければならないが、護符あるいはお守りとして身に付けられる。著名なものは『王書（シャーナーメ）』の実子殺しの逸話で、ソフラーブが父の英雄ロスタムの形見に腕に付けていたモフレである。

古代の世界ではお守りとして、人間の首を携えたり、展示したりすることがあった。この人首は、文化によっては動物（トーテム）の首となる。いわゆる装身具が呪具に由来することは再論を俟たないが、われわれが今日、たとえば、金貨銀貨をペンダントなどとして身につけるのも同じ経緯である。そのような貨幣には王などの横顔が刻まれており、それゆえに、装身具にされたことは既に論じたところである。

（おくにし しゅんすけ、大阪外国語大学）